

今年で戦後七十四年を迎えます。終戦の日を境に、わが国は大きな変ほうを遂げましたが、私たちのふるさとにも例外ではありません。現在、町の発展の基となっている工業団地は、戦前は、一面の桑畑、戦時中は軍の飛行場として数多くの航空機が離発着していた場所です。そうした一時代前の史実も、歴史の彼方に忘却されようとしています。この地から戦地に赴き、再び帰ってくることもなかった方々も大勢おられます。悲惨な史実を風化させないためにも、先人達が体験した戦争の惨禍とそこからの復興の歩みを物語る資料を紹介いたします。

愛川町郷土資料館 企画展

戦争の記憶

戦後74年

■歴史講座

「写真で見る相模陸軍飛行場」

日時：令和元年8月31日(土) 午後1時30分～3時30分
 会場：郷土資料館会議室
 講師：山口研(郷土資料館学芸員)
 定員：20名
 申込：資料館において電話受付。

8月1日(木) 午前9時から先着順



※期間中の休館日はありません。

令和元年 **7/20**(土) ~ **9/1**(日) **愛川町郷土資料館 企画展示室・エントランスホール**
 開館時間 9:00~17:00

問い合わせ 愛川町郷土資料館 〒243-0307 神奈川県愛甲郡愛川町半原5287番地 TEL.046-280-1050 FAX.046-280-1051
 ※入館料は無料ですが、愛川町郷土資料館に車で来館の場合、県立あいかわ公園駐車場が有料(普通車500円)となります。
 この事業は、県営電気事業の「ダム・発電所地域振興事業補助金」を活用して、費用の一部支援を受けています。

戦争の記憶

— 戦後 74 年 —

出征兵士とその家族

昭和14年11月17日、中国大陸での戦線拡大により、一人の成人男性に召集令状が届きました。家族と家業から離れ、軍務につく者が続きます。

寄贈：熊坂尉明



千人針 (せんになはり)

出征兵士は、知人に頼み、木綿の腹巻に赤糸で一人一針ずつ縫ってもらい、千個の縫い玉が完成後、お守りしました。真年の女性は年齢の数だけ縫います。「虎は千里行って千里を帰る」との故事から、虎の絵が好んで描かれました。

寄贈：鈴木香代子



熊谷陸軍飛行学校相模分教所卒業写真

相模陸軍飛行場は、当初、熊谷陸軍飛行学校の相模分教所として機能していました。しかし、戦局悪化に伴い、昭和19年7月20日の少年飛行兵14期生卒業を最後に閉校となり、以後は戦闘機隊の基地となります。この写真は閉校時の卒業記念です。背景は、訓練に使用した九五式一型練習機。一人ずつの写真の他、班ごとの集合写真が全員に渡されました。写真所蔵者の安味貞嘉氏は、後に、特攻隊に編入されますが、埼玉県高萩飛行場で出撃待機中に終戦となりました。

所蔵：安味貞嘉



列線に並ぶ「疾風」と給油車

訓練前の戦闘機に対する給油が行われていたようです。既に操縦者が翼上にいるので、始動直前でしょうか。しかし、米軍機の来襲が激しくなった大戦末期には、こうして整然と航空機を並べることが困難になっていきました。

所蔵：一練飛会



戦闘機「疾風」を背景に

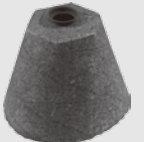
写真旧蔵者の衛藤全由伍長は、昭和19年12月から、相模飛行場で戦闘機「疾風」の助教(教員)として操縦技術を教える立場でした。教え子の少年飛行兵14期福島正之兵長が肘を疾風のプロペラにかけてポーズをとっています。撮影日時は明確ではありませんが同氏が相模陸軍飛行場に来たのが昭和19年12月なので、それ以降の撮影です。福島兵長は、やがて伍長に進級し、衛藤氏と同じく、助教として、後輩を指導する立場になります。しかし、その後、特攻隊第176振武隊に配属され、この飛行場で待機していましたが、出撃前に終戦となりました。

寄贈：田原聖司



標札「出征軍人の家」
出征軍人を送り出している家であることを示す標札です。玄関の標札とともに掲げていました。

寄贈：小倉善幸



燈火管制用傘

空襲に備え、燈火管制が敷かれ、個人宅の照明器具も下方向にのみ、光が照射されるように傘をかぶせました。

寄贈：新井宣博



三八式歩兵銃

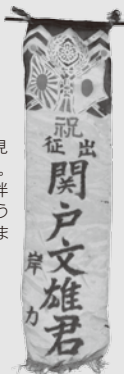
明治38年に仮採用、39年に正式採用された日本陸軍歩兵の主兵器です。各自に渡された銃の管理責任は各々が負いました。手入れが不十分で、少しでもサビなどが見つかったら、厳しい制裁がまわっていました。口径は6.5ミリ。

寄贈：中丸保行

出征兵士の 幟旗(のぼりばた)

出征兵士は、郷里で盛大な見送りを受けて出発しました。しかし、戦局が悪化するに伴い、防諜上の理由から、こうした光景も見られなくなりました。

寄贈：関戸利夫



戦火の跡 格納庫基礎が残る

昭和30年代の光景。木造二つ屋根型格納庫の基礎部分のみ並んで残っています。現在でも、その一つが桜台地区にあります。撮影者の小島静夫氏は、戦時中、この飛行場に軍属として勤務していました。実兄の小島重雄氏も共に勤務していましたが、昭和19年2月「航空技術兵」として召集され、翌20年6月15日、フィリピンのルソン島バギオ方面で戦死されました。

撮影：小島静夫



内陸工業団地の造成

昭和36年から始まった内陸工業団地の建設計画により、相模陸軍飛行場は生まれ変わります。舗装道路と排水溝が設置されたばかりの背後に、飛行場の格納庫基礎のコンクリートと本部棟が見えます。戦後の復興を象徴するかのような光景です。

撮影：小島静夫